CHURASHIMA MUSEUM

美ら島まるごとミュウジアム

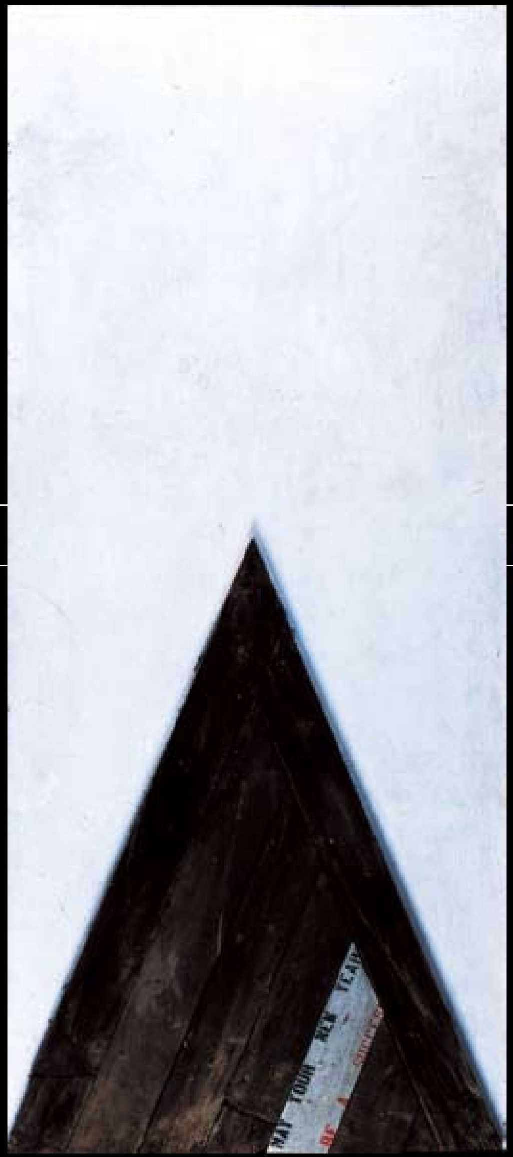
第7回

前衛美術の動き――グループ耕（こう）

大浜や城間らが一九六一年「前衛宣言」をして結成した「グループ耕」は、当時の世界や日本の美術の動向に影響を受けています。ペンキや砂、セメント等日常の物を使って、物そのものを見せようとする作品を発表します。作品に込められた思想は難解とされていましたが、多くの鑑賞者があり、その作意について新聞等を通して活発な論争が展開され、その後「亜熱帯派」や野外で実験的な展示を行うグループの出現に繋がっていきました。

1960年代－前衛美術

激動の時代を迎えつつあった沖縄の1960年代。
美術においても既存の価値観を揺り動かそうとする動きがありました。
その中から大浜用光と城間喜宏の作品を紹介します。



大浜（おおはま） 用光（ようこう）
（1929 年生まれ）

作品名：「Λ（ラムダ）」

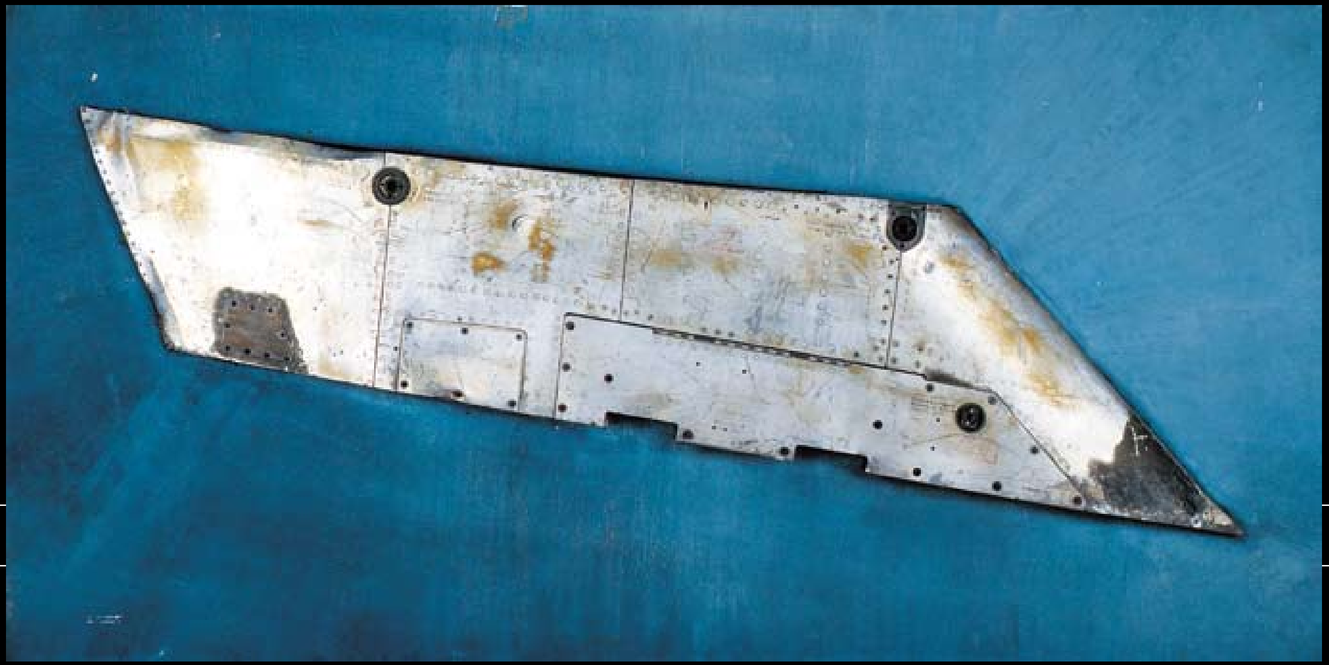
●制作年：1995年　●材質：板、アクリル　●寸法：244.0×107.4 cm
（外寸:248.7×112.3×7.0cm）

本作品は、米軍基地から出た材木を使用して、長方形の枠の中にギリシャ文字「Λ」に木材を配置しています。そこには物語や情感を漂わせるものはなく、どう理解したらいいのか戸惑いを覚えることもあるでしょう。

あらゆる物が削ぎ落とされ、物を物として、素材そのものを見せていく。作品との静かな対話が深い思考を生み出してくれるのかもしれません。

（※本作品は、1960年代に制作された同名の作品を同じモチーフで再制作したものです。）

所蔵:県教育庁文化施設建設室(県立博物館・美術館所管)



城間（しろま） 喜宏（きこう）（1935年生まれ）

作品名：「亜熱帯の島から」

●制作年：1968年　●材質：パネル、戦闘機の破片、塗料　●寸法：249.4×126.5×13.9cm

ベトナム戦争期に制作された本作品には、本物の戦闘機の破片が貼り付けられています。厚みとともにかなりの重量があり、観る者に驚きと同時に絵画なのか？と疑問も抱かせます。

日常的に爆音が聞こえ、戦争に関連した様々な事件が生活の中で起きている異常な状況の中では、戦闘機そのものを見せることでしか、自分たちの置かれている異常な状況を表現することができなかった、ともいえるのではないでしょうか。

2007年11月1日
那覇市おもろまちにOPEN!!
沖縄県立博物館・美術館

http://www.museums.pref.okinawa.jp/